

## オススメ Book

### 「脱病院化社会」イヴァン・イリッチ（金子嗣郎 訳）

イリッチは、現代社会や制度に対する批判的な視点で知られています。さらに医療制度に対する批判も展開されています。彼は医学が専門化と技術進歩によって、本来の目的である健康の提供から逸脱してしまっていると指摘しました。医療が過度に依存され、過剰な医療処置が行われ、その結果として患者の健康が損なわれる可能性があるかと警告しました。イリッチの著作は、技術や制度の進展がもたらす影響に対する独自の視点を提供しており、その立場は一部で賞賛されつつも、一部では議論の対象となっています。

## 【コラム】「施設」を再考する

### 社会に潜在している思想～津久井やまゆり園事件～

2016年7月、津久井やまゆり園事件が起こった。加害者は「重度の障害者には生きる価値がない。社会に不幸をもたらすことしかできない」と主張した。そして「障害者施設に勤務してわかった。心失者は社会を不幸にする。私は結果を出した。あなたはどんな解決策があるのか」とも述べている。加害者ははじめからそのような主張をしていたわけではない。元々は入居者へ暴力行為をした先輩職員に憤慨するような人物であった。施設で働いてきた過程で、前述した思想が強化されていったのだ。周囲の人はどのように、彼を見ていたのだろうか。結局のところ、施設とは「人」である。そこにいる人たちによって全体の雰囲気は如何様にでもなる。施設とは単なる「箱」ではなく、複雑に絡み合った社会の縮図が表現されているようにも思う。施設は支援の目指すべき理念の方向性に向かえるのか、それとも逆行してしまうのかが問われているのではないか。

### 閉鎖性からの脱却

施設の構造的問題を津久井やまゆり園事件は私たちに突きつけた。施設を一概に批判はしないが、一定程度批判的に議論することは必要だと考える。とりわけ日本の施設はその閉鎖性に問題がある。施設という「箱」の中は外側の人間からは見えづらく、ベールに覆われてしまう。脱施設よりも脱閉鎖を目指し、開放性を高め、外から見える風通しの良い構造が必要である。でなければ、ポジティブな施設ではなく、ただの「収容所」として機能してしまう。施設の中が社会から疎外されることにより本人の自由の制約や管理の範囲は拡大しやすい可能性がある。施設の閉鎖性が強化されることは社会からの孤立を意味し、それは人権侵害、とりわけ暴力など虐待の温床となり得る。適正な基準で受け皿となるため、まずは本人の判断が主張されやすい暮らしを考える必要がある。私個人の感覚だが、精神保健福祉をフィールドにしているため、精神障害者、認知症患者は自分の意思で入院、入所することは稀であり、誰のための施設であるか再考しなければならない。



## 新ロゴ紹介 & 今年の振り返り

法人ロゴを SCRAP & BUILD（スクラップアンドビルド）しました。これに伴い、スタッフの名刺やパンフレットもリニューアルし、心機一転相談支援事業および訪問看護事業に取り組んでいく所存です。

戸田個人としても、2023年は訪問看護事業の立ち上げ、精神科医療の身体拘束問題への関わり等、はじめての挑戦が多かった1年でした。寝る時間以外、ほとんど仕事をしていたような気がします。12月は学会発表を控えておりますが、最後まで走り切りたいと思います。

来年の目標はたくさん「読書」することです。自分の中で価値観や考え方、視点の破壊と創造の試行錯誤を繰り返し続けていきたいと思っています。

来年もどうぞよろしくお願い致します。

